

平成26年度卒業生アンケート及び 企業等アンケート集計結果の分析

人文学部

教育学部

医学部医学科

医学部保健学科

理工学部

農学生命科学部

平成26年度「卒業生アンケート及び企業等アンケート」 集計結果の分析

【人文学部】

問4

5：満足，4：どちらかといえば満足，という回答があわせて80%を超え，平成23年度の調査結果と同様，満足度の高さは継続している。

問5

かつては全学でもっとも設備が貧弱であったが，改修以降学生研究室等の整備も行われ学生の勉学の環境は改善したと考えている。ただし，他学部 비해，まだ改善の余地がある。

問6

文科系と体育会系では活動の内容と必要とされる設備等の性格が異なる。平成23年度の調査結果と同様，3：一概には言えない，という答えが多いが，文系は少人数でサークルを組む事例が多く，対応が難しい。

問7

5：十分だった，という答えは45%，比較的高いが，4：不足だが問題はなかった，との合計が59%である。平成23年度調査結果を受けて設定した60%という努力目標に近づいているものの，なお一層の努力が必要である。

問8

5：良い方へ変わった，4：少しは良い方へかわった，という回答が平成23年度調査結果と同じ，90%近く，全学で最も高い。人間的にもっとも成長する時期であり，人文系としては，妥当な数値であると考えられる。

問9

学部を問わず，幅広い知識，教養を身につけることの重要性を第1位に挙げている。専門外の分野に興味を持つようになるのは，むしろ学年が進んでからで，新しい教養教育科目の学年配置に工夫が必要であると考えられる。

問10・問11

21世紀教育科目の教育目標である幅広い知識の習得，総合的な判断力，豊かな人間性の涵養について，3：一概に言えない，4：どちらかといえば身に付かなかった，という否定的な回答は相対的に多い。新しい教養教育に期待したい。

問12

回答者が卒業後2～3年以内であり，大学で学んだ事の意味を十分に考え，評価することは難しいと考えるが，3：一概に言えない，2：あまり役に立っていない，1：役に立っていない，の合計が43%に上っている。学生が何を求めて入学し大学生活をどのように送っているか精査する必要がある。

問13

5：非常に役に立っている，4：役に立っている，の合計は78%で，前回の調査結果より改善している。

問14・問15・問16

今後の学部教育改善の参考にしたい。

【教育学部】

問4

「満足している」、「どちらかといえば満足している」と回答した者が78.6%、「どちらかといえば満足している」、「満足していない」と回答した者が7.1%であり、概ね満足しているとの回答を得た。

問5

「十分だった」、「不足していたが学習や研究はできた」と回答した者が68.2%、「不十分で学習や研究がやりにくかった」と回答した者が14.3%あり、教育学部校舎の改修工事が続いたことにより、不便を感じたものと思われる。

問7

「十分だった」、「不足していたが就職活動に問題はなかった」と回答した者が64.3%、「不十分で就職活動に苦労した」、「不十分で就職活動ができなかった」と回答した者が11.6%であり、就職活動支援体制の改善が必要であると考ええる。

問8

「良いほうに変わった」、「少しは良いほうに変わった」と回答した者が88.3%を占め、「あまり変らなかった」、「まったく変らなかった」と回答した者が5.8%であり、概ね良好な評価が得られた。

問9

1位が「教養・知識」、2位が「物事を考える多角的な視点」及び「職業上役に立つ知識と技術」となっており、教員養成学部としての機能を十分果たしていると考ええる。

問12

「非常に役に立っている」、「役に立っている」と回答した者が76.6%、「あまり役に立っていない」、「役に立っていない」と回答した者が9.7%であり、概ね良好な評価が得られた。

【医学部医学科】

卒業生アンケート回収数は、48名分と一部ではあるが、弘前大学で受けた教育に対する貴重な意見が寄せられていると思われる。

問4

教育内容に関しては、73%が満足しているとの回答があった。他学部と同様で、弘前大学の熱心な教育体制が伝わっていると思われる。

問5

学習施設に関しては、支障なかった割合が60%であった。他学部と同様で、問4と比べると、やや低率となっている。限られた施設のため、自習スペースやコンピューター環境の相対的な不足が、回答に反映されていると思われる。特に医学科のコンピューターは、約130台と1学年分相当であり、さらなる充実が期待されている。

問6

課外活動施設に関しては、支障なかった割合が63%であった。学部と同様であった。本町キャンパスの限られた敷地では、課外活動が十分に行えない一方で、文京キャンパスとは近い距離にあるため、文京キャンパスで活動が行えるため、このような回答となったと思われる。

問7

医学科においては、臨床研修先は、厚生労働省の下でのマッチングシステムで行われるため、「一概に言えない」が最多の回答となったと思われる。

問8

学生生活により、自分自身が良い方向に変わった割合が77%であった。個人の成長とともに、他学部と同様で、弘前大学の熱心な教育体制が伝わっていると思われる。

問9

教育全体を通して身についたと感じた第1位が、「教養・知識」であり、他学部と同様で、弘前大学の幅広い内容の教育体制が伝わっていると思われる。

問12

大学で学んだことが、仕事に役立っている割合は、92%であった。弘前大学の充実した教育体制が反映されていると思われる。加えて、医学教育は、基礎医学・臨床医学ともに多くの実習時間を含む実践教育であるため、他学部よりも高い割合の回答となったと思われる。

問17

上記の問いと同様であり、施設面での充実を求める意見が多い。

総括として、今後も、カリキュラムを適宜更新して、さらに充実した医学教育体制を目指したい。施設面の充実には、時間を要するものの、着実に実施してゆきたい。

企業等アンケートには、医学科卒業生が勤務する医療機関の回答がほとんど含まれていないため、省略させていただきます。

【医学部保健学科】

回収率が全体の20.2%よりは高いが20%台であり、信頼性の点からも今後回収率を上げる対策が必要である。

問4

教育内容に関する満足度は、「満足している」と「どちらかといえば満足している」を合わせると回答者の69.9%を占めた。一方「どちらかといえば満足していない」と「満足していない」を合わせると9.6%おり、教育内容の改善を必要とする部分もある。

問5・6

学習や教育に関わる施設・設備・備品に関しては、「十分だった」と「不足していたが学習や研究はできた」と回答した学生は66.5%おり、「不十分で学習や研究がやりにくかった」と「不十分で学習や研究ができなかった」と回答した学生は9.6%おり、一方、課外活動に関わるものではそれぞれ59.6%、11.6%であり、長期にわたる校舎改修のために学生に施設面で不便等を感じさせた可能性がある。

問7

就職活動への支援に関しては、「十分だった」と「不足していたが就職活動に問題はなかった」の合計が79.5%であり、「不十分で就職活動に苦勞した」と「不十分で就職活動ができなかった」が2.7%であり、ほぼ満足できる回答であった。

問8

学生生活では、「自分が良いほうに変わった」と「少しは良いほうに変わった」の合計が87.6%を占め、学生生活を振り返って良い評価をしていた。

問9

21世紀教育・専門教育全体を通して身についたものは、第1位 教養・知識、第2位 職業上に役立つ知識と技術、第3位 特に専門的な知識と技術であり、保健医療系の専門職を目指すための教育として受け止めていることがうかがえる。

問12

仕事に関わることで、弘前大学で学んだことや、大学での経験が「非常に役立っている」と「役立っている」の合計は82.2%を占め、保健学科を除く他学部合計63.5%を大きく上回っている結果が今回も得られた。

【理工学部】

問4

理工学研究科教育内容全体に対する満足度は、「満足している」「どちらかと言えば満足している」を合わせて70%を越えており、高い割合の卒業生が充実し満足のかく学習成果をあげられている結果と思われます。一方、わずかでも満足感を得られていない学生の割合は10%を下回っており、23年までのアンケートの結果と比べて大きく減少しています。基礎学力を重視したカリキュラムと実験・演習に重点を置いた教育プログラムの編成等、理工学部におけるこれまでの教育改革の効果が着実に表れてきた結果と思われます。今後、学生教育相談室の強化や実験・演習科目へのTAの増員配置等、学生への学習支援策の充実により満足感を得られない学生割合の減少と満足感を得ることのできた学生割合の増加につなげていきたいところまです。

問5

学習や研究に関わる施設・設備・備品については、理工学部に関連する機器分析センターにおける機器の整備を含めて、理工学部全体の研究設備の充実が図られてきた結果、満足度が高まってきたように感じられます。理工系学部においては、先端的な技術への開発研究教育の充実が避けて通れず、設備の更新や先端機器の新たな導入等、継続的な施設・設備・備品の充実、既存施設の改善や有効利用を今後も続けていくことが重要と思われます。

問6

課外活動に関わる施設・設備・備品については、「一概に言えない」との回答が理工学部をはじめとして多くの学部での回答結果で多数を占めているように見えます。理工学部では、「一概に言えない」との回答が多数を占める一方で否定的な割合は少なく、課外活動に関わることが少なかった卒業生が、判断に迷ってこの選択肢を選んだ結果とも考えられます。また、学部の教育課程における学生生活の場と、課外活動における学生生活の場とが必ずしも一致しないことも、理工学部での回答結果に影響を与えていることが考えられます。課外活動に関わる施設・設備・備品についても充実が図られてきたところまですが、今後も継続していくことが重要に思われます。

問7

就職活動への支援については、「一概に言えない」との回答がかなりの割合を占めているように感じられます。昨今の自由応募による就職活動を取る学生の割合の増加から、支援を受けているが自主的な活動により就職活動を乗り越えている学生の割合が増えてきた結果の表れと考えられます。一方、就職活動への支援の満足度の高い卒業生は半数以上で、今後も学部教員と就職支援センターの連携を強化した就職支援の継続が重要と思われます。さらにその一方で、10%未満ではありますが「不十分」との回答が見受けられることから、一層の改善の余地が残されていると考えます。理工学部では、学科や専門分野が指定された求人依頼も少なくなく、これらの求人に関する情報も学生の進路選択に生かすことができるような支援を進めることによって、さらに満足度を高めることができる可能性があると思われます。

問8

学生生活によって、自身が良い方向に変わったかどうかの設問には、理工学部を初めほとんどの学部の卒業生から、肯定的な評価を受けています。各分野での継続した取り組みが評価されている結果と思います。一方で、「変わらなかつた」との回答が一定数認められることから、さらに改善の余地のあることも示唆され、改善への取り組みを継続してゆくことが必要と考えます。

問9～11

理工学部では全学的に高い「教養・知識」に加え、「論理的な思考力」「物事を考える多角的な視点」が身についたと感じる卒業生が上位を占めています。理工学部が目指す「科学・技術の発展に貢献できる個性豊かで独創性に富んだ人間性の形成に向けた教育」の成果が表れた結果と考えられます。21世紀教育科目についての問9の結果は、問10～11の「身についた」との回答と「重視していた」との回答数がもっとも多かった「幅広い知識の習得」と関連した項目が多数を占める結果となっています。「総合的な判断力」「豊かな人間性の涵養」のような画一的な物差しで測ることのできない事項については、第2位までに位置づける学生数が半数を超えており、これらの項目も重要であることは理解されているように思われます。

問12～13

科学・技術の発展は著しく、大学を卒業後もそれぞれの分野で絶えず学習を続けていく必要に迫られることは明らかです。理工系学部で「非常に役に立っている」「役に立っている」との回答割合が低いのはこのような現状があるためとも考えられます。一方、役立っていないとの回答割合も低く、理工学部で取り組んできた基礎学力を重視した教育プログラムの成果により、それぞれの分野で活躍するに十分な基礎学力の習得がなされてきた結果の表れとも思えます。問13の結果についても同様に理解することが可能です。

問14～16

今後の教育や学生支援に関する要望に関する設問、問14～16においては、集計が大学全体での結果であるためか、多岐にわたった幅広い意見が寄せられたものと感じます。理工学部で取り組んできた「深い専門知識」と「幅広い基礎的学力」の2つの項目の回答数が半数に達しており、理工学部のカリキュラムが学生の期待に添ったものとなっていると考えます。研究室・ゼミ活動については、学部後半から大学院教育において充実が図られてきていますが、さらに支援を充実することが望まれており、大学院教育を含めた教育の重要性が認められてきている結果と感じます。また、社会人を対象とした大学院コースの設置等、卒業生が再び本学で学ぶための環境が整えられてきていますが、問16の回答には卒業後にも専門的知識を習得する機会を得る場として本学への期待が表れており、卒業後の学びの場として、本学がさらに重要な役割を果たすことが望まれます。

【農学生命科学部】

今回のアンケートの回収率は全体で20.2%であるが、農学生命科学部の回収率は約17%で、また、回答数は大学全体の12%で最低であった。農学生命科学部の卒業生のアンケートに対する意識の低さが認められる。

教育内容全体に対する満足度は（問4）、「満足している」と「どちらかといえば満足している」はそれぞれ25.5%と58.2%で、合わせると83.7%となった。一方で4%の卒業生が満足していなかった。しかし、全体的には、ほとんどの卒業生が農学生命科学部の教育に対して満足していることが分かる。

学習・研究に関わる施設、設備、備品については（問5）、「十分である」が38.8%で、また「不足していたが学習・研究はできた」も35.7%であった。これは、平成19年度から進めている学部活性化経費を使って、学科や研究室に必要な設備や備品等の補充により学習・研究環境の改善によるものと考えられる。

課外活動に関わる施設、設備、備品については（問6）、「十分であった」と「不足していたが課外活動はできた」を合わせると63.3%で、前回のアンケート結果より上昇していた。一方、批判的な意見も約3割強であったことは、これら設備、備品等の充実を図ることが、今後の学部として課題と考えている。

就職活動への支援に関しては（問7）、「十分であった」と「不足していたが就職活動は問題がなかった」を合わせると45.9%で、「一概に言えない」は43.9%であった。農学生命科学部の就職活動の支援は全学的に最低であった。例年実施している卒業直前のアンケート調査でも把握しており、平成21年度から各学科から選出された委員で構成する就職対策委員会を立ち上げ支援活動を行ってきた。しかし、まだ就職支援に対して不満が解消されていないことから、本委員会の就職支援のあり方の検証が必要と考えている。

学生生活による意識の変化については（問8）、「良い方向へ変わったとする卒業生が82.7%と大半を示した。前回のアンケート結果（80.3%）に比べ2.4ポイント上昇したが、全学平均（85.9%）と比較してわずかに低い値ではあった。全体的には、本学部の教育目的・方針がうまく機能しているものと判断される。

21世紀教育・専門教育全体を通しては（問9～11）、「教養・知識」、「物事を考える多角的な視点」、「特に専門的な知識と技術」を上位であった。教養や専門の知識の習得を重要と考えていることが分かる。21世紀教育科目において、学生の意識は1位が「幅広い知識の習得」、2位「総合的な判断力」、3位「豊かな人間性の涵養」で、「幅広い知識の習得」について「どちらかといえば身に付いた」と回答した卒業生が半数以上を占め、学生の意識を反映していると思われる。しかし、判断力や人間性の涵養については「一概に言えない」が最も多かった。本学及び本学部の教育体制が機能していると考えられるが、学生の意識も重要であると判断している。

特に仕事に関わることで、弘前大学で学んだことと経験が役に立っているかの設問（問12、13）に対して、全学では66.8%の卒業生が「非常に役に立っている」と「役に立っている」と回答しているのに対し、本学部の卒業生は55.1%と11.7ポイント低かった。また、仕事以外の日常生活の中で役に立っていると感じている卒業生は、全学の平均値（67.3%）と同じであった。このことは、弘前大学での学園生活において学んだことや経験が十分に多方面で生かされていることを示唆している。農学生命科学部の卒業生の場合、食料生産、加工・製造、販売・流通、また他業種と広範な領域に就職しており、本学部の専門（農学や生命科学分野）の特殊性から多少離れる傾向があるため、問12の回答が全学より低かったと考えられる。

企業等アンケートで、本学部の卒業生が就職している企業からのコメントに示されているように、高く評価させており、今後の採用にも前向きであることが示されていた。

今後の弘前大学における教育や学生支援に対する意見を記載する項目（問17）において、少数意見ではあるが、学部として今後検討する内容のものであった。例えば、カリキュラム（時間割作成の工夫、科目のバッティング）、履修相談、設備（図書館の充実、図書の実室、開館時間の延長、フリージャーナルの取得）、学生相談、就職支援等である。以上については、卒業生の意見を真摯に受止め改善する必要があると考えている。